鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた 1940年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態

ACTUAL CONDITIONS OF ARCHITECTURAL STRUCTURES OF AINU SETTLEMENT AT SHIRAOI IN 1940, BASED ON "COLLECTION OF THATCHED-ROOF HOUSES OF THE AINUS" BY FUKUHEI TAKABEYA

佐久間 学*, 羽 深 久 夫**

Manabu SAKUMA and Hisao HABUKA

The Shiraoi Village Ainu settlement that Takabeya investigated in 1940 was divided among the villagers such that each Ainu family household was allotted one section of land. Houses belonging to "village chief/equivalent" villagers had elongated floor space and both the main and auxiliary structures were larger in scale than those belonging to the "other people" villagers. Furthermore, "village chief/equivalent" villagers owned structures. "Other people" villagers did not possess such structures and what they did possess was apparently intended only for habitation. It is also possible that gabled roof houses were used both for habitation as well as for auxiliary activities. In addition, there were traits common among the houses of both groups. For example, construction was arranged such that houses had their longer axis parallel to the east-west axis of the settlement.

Keywords : Ainu people, Houses(Chise), Attached buildings, Settlement(Kotan), Shiraoi

アイヌ民族, 住居 (チセ), 附属建築物, 集落 (コタン), 白老

1. 研究の背景と目的

1940年における白老村アイヌ集落(図1)は、1889年に胆振国白老郡白老村字古潭(現在の白老町大町1丁目)に給与地が指定され、ウヨロ、ブーベツ方面に散在していたアイヌ民族が移住させられたことから始まる¹⁾。1911年の東宮殿下(後の大正天皇)の白老村の来訪を契機に、白老村はアイヌ民族の居住地区として知られるようになり、多くの皇族や研究者が来訪した²⁾。アイヌ民族の建築に関する研究の第一人者である鷹部屋福平氏³⁾も、1940年に白老村アイヌ集落を来訪し、23棟の建築物についてその写真と平面図を後世に残す資料として「毛民青屋集⁴⁾」7～8に記録している。その後も観光客は増加し、環境的に適切な場所への移設が求められるようになり、白老村アイヌ集落は、1965年にポロト湖畔に移転され、観光施設「しらおいポロトコタン⁵⁾」として、復元建築物や博物館を建設し、アイヌ民族の文化の保護と後世への継承を担っている。白老村アイヌ集落のあった大町1丁目は、区画整備され、住宅地となり現在に至る。

「毛民青屋集」7～8は、「しらおいポロトコタン」に復元されているアイヌ民族の伝統的な建築物⁶⁾と考えられている茅壁茅葺屋根の寄棟建築物だけではなく、ガラス窓やマサ壁を設けた外観を持つ寄棟建築物も収録していることから、同化政策の影響が現れた1940年当時のアイヌ民族の建築物⁷⁾の実態を考察でき、また、集

落単位で建築物を収録していることから、建築物の外観や平面規模の比較ができる。鷹部屋氏の白老村アイヌ集落に関する研究⁸⁾を見ると、北海道の各地に存在したアイヌ民族の建築物の地域性に関する研究において、白老村アイヌ集落を例にあげ、現地調査と古老への聞き取り調査から小屋組構造等の特徴について考察している。しかし、研究内容は、1940年までに見られたアイヌ民族の建築物の伝

図1 1940年当時の白老村アイヌ集落の位置

* 札幌市立大学大学院デザイン研究科
博士後期課程・修士(デザイン学)

Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M. Des.

** 札幌市立大学大学院デザイン研究科 教授・博士(工学)

Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

本研究は、「毛民青屋集」7～8を基にして、古地図や空中写真といった白老村アイヌ集落を記録した資料を検討する事により、白老村アイヌ集落の土地区画の特徴と鷹部屋氏の調査した居住地と建築物を明らかにし、建築物の屋根形状や外観意匠や入口と窓の位置といった外観の特徴、平面形や延べ床面積といった平面規模の特徴、及び建築物の所有状況を分析し、1940年当時の白老村アイヌ集落の建築物の実態を明らかにする。

(1)「毛民青屋集」7～8

人名表に記載の有る 24 名の内、建築物の写真と平面図の収録があるのは 20 名であり、残りの 4 名については写真も平面図も収録されていない。収録されている 20 名は、住居 1 棟と納屋 1 棟の所有者が 2 名、住居 2 棟の所有者が 1 名、住居 1 棟の所有者が 17 名であり、建築物数の合計は、住居 21 件、納屋 2 件の 23 件で、23 件全てが「平地式の茅葺屋根の寄棟建築物（以下、平地式寄棟建築物）」である。その他、「平地式寄棟建築物」の周辺には、人名表に記載の無い「平地式の茅葺屋根の切妻建築物（以下、平地式切妻建

表1は調査票の記載内容をまとめたものであり、表記方法は以下の通りである。建築物は、「平地式寄棟建築物」を「□」、「平地式切妻建築物」を「▲」、「付属建築物」を「●」とした。人名表に記載のある「平地式建築物」及び「付属建築物」について、アイヌ民族の所有者名は「01～20」の数字番号で表記し、用途別に住居を「H」、物置を「S」、高床倉庫を「P」、熊檻を「B」、イナウを「I」と表記した。「平地式切妻建築物」の名称は、「a～g」の小文字アルファベットで表記した。

本研究は、白老村アイヌ集落の土地区画を明らかにするため、以下の資料を用いた。

下附実測図は、1912 年に作製された 1200 分の 1 の白老村アイヌ集落の実測図であり、給与地区画とその土地の所有者名が記入されている。下附実測図から、1912 年における白老村アイヌ集落は、360 坪（12 間×30 間）2 区画と 450 坪（15 間×30 間）90 区画と 630 坪（15 間×42 間）4 区画の計 96 区画で整備された事が分かる。96 区画の内 67 区画は給与地としてアイヌ民族に割り渡され、残りの 29 区画は所有者がいなかった。道路は、道路幅が 5 間の南北道路 2 本と東西道路 3 本を基本とし、その他、南北道路を繋ぐ道路幅 3 間の東西道路が 1 本あった。アイヌ民族以外の所有地は、96 区画外の集落北部の国鉄室蘭本線線路付近にあった。

調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1	調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1	調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1
1S	□01H, ●01P ●01B-1, ●01B-2	□01H : : : :01H : : : ●01B-1 : ●01B-2 : □01H : : :01H : : : □01S : : : :01S : : : ●01P : ●01B-1 : : ●01I : ●01B-3 : : ●01I : ●01B-3 : : ●01P : ●01B-1 : ●01B-2 : ●01B-1 : : : ●01P : : : ●01I : : : □02H, ●02P, ●02B	385 395 405 415 425 435 445 455 465 475 485 495 505 515 525 535 545 555 565 575 585 595 605 615 625 635 645 655 665 675 685 695 705 715 725 735 745 755	□09H □11H □13H □14H □08H □17H □19H	□05H : □05S : ▲a : □04H : View from □05H ※3 ●09B : ●09P : □09H ●09P : □09H : □09H : : □17H : □11H : : □13H : : □20H : □13H : : □13H : □17H : : □13H : □17H : : unclear photograph ※4 □14H : : : unclear photograph ※4 ▲b : □08H : □08H : ▲ab : □17H : : □17H : : □17H : : □19H : : □19H : : unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 ▲c : □15H : ▲c : □15H : unclear photograph ※4 □16H : □16H : □16H : □15H : ●10B : ●10P : □10H : ●10P : □10H : : □10H : ●10I :	765 775 785 795 805 815 825 835 845 855 865 875 885 895 905 915 925 935 945 955 965 975 985 995 1005 1015 1025 1035 1045 1055 1065 1075 1085 1095 1105 1115 1125	●10P : : : ●10P : : : □10H : ●10P : : □10H : ●10P : : □12H : : : □12H : : : view from □12H ※3 □12H : : : □12H : : : □06H : : : □06H : : : unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 □20H : ▲g : □20H : : ▲f : □18H : : ▲f : □18H : : unclear photograph ※4 unclear photograph ※4 □03H-2※2 □03H-2 : : : □03H-2 : : : ●09B : ●09P : : ●02B : ●02P : □02H : ●02I ●01P : ●01B-1 : □02H : □01H □01H : ●01B-1 : : unclear photograph ※4 ●02P : □02H : □01H : ●02B □01H : : : □01H : : : ●01B-3 : ●01I : : □01I : : : □01I : : : □01I : : : ●01B-3 : ●01I : : ●01I : : : ●01I : : : ●01I : : : ●01I : : : ●01I : : : ●01B-3 : ●01I : : ●01I : : :	

※ 4 撮影場所の分からない写真を指す。

②「新白老町史下巻－昭和初期白老アイヌコタン図¹²⁾」(以下、コタン図)

コタン図は新白老町史に添付されている白老村アイヌ集落の建築物とその所有者を記載した地図である。1937年までに白老村アイヌ集落内に存在した白老第2小学校や北海道庁立白老病院を記載していることから、コタン図は1926年から1937年の地図である。コタン図から、1926年から1937年における白老村アイヌ集落は、84名(世帯)のアイヌ民族の住居があった事が分かる¹³⁾。

③「国土地理院所蔵空中写真¹⁴⁾」(以下、空中写真)

1944年撮影の空中写真は、現在国土地理院が所蔵する入手可能な白老村を写す空中写真の中、鷹部屋氏が調査した1940年に最も近い状況を写し込んでおり、建築物が存在した場所の把握ができる。下附実測図の全6本の道路は、空中写真においても同一の場所に見られ、6本以外の道路は空中写真にも見られないので、道路割りは変化していない。

3. 白老村アイヌ集落の土地区画

図2は、1940年の鷹部屋氏が調査した20名の居住地と、1937年まで存在した白老第2小学校と北海道庁立白老病院を1912年の下附実測図に配置したもので、図2を基に白老村アイヌ集落の土地区画の特徴と鷹部屋氏の調査した居住地と建築物を明らかにする。

(1) 土地区画図の作製(図2)

1912年の土地区画は、1912年時に所有者のいない給与地区画(以下、区画「a」)、1912年時にアイヌ民族に割り渡された給与地区画(以下、区画「b」)、1912年時に給与地区画外の区画(以下、区画「c」)、アイヌ民族以外の所有地区画(以下、区画「d」)の4つである。調査対象20名の居住地の特定について、調査対象20名の居住地を1912年の土地区画上に当てはめると、居住地の区画は、18名が1区画、2名(居住者「01」と「03」)が2区画を利用しているため、合計22区画となる。22区画の内12区画は、下附実測図の各区画の姓と人名表に記載される所有者の姓の記名位置が一致する居住地(以下、居住地「A」)であり、1912年と1940年で同じ所有者(家系)の区画「b」と考えられる。残り10区画の内、6区画はコタン図の姓と人名表に記載される所有者の姓の記名位置が一致する居住地(以下、居住地「B」)であり、4区画は人名表のみに記載のある居住地(以下、居住地「C」)である。人名表の所有者名が下附実測図に記載されていない居住地「B」及び居住地「C」の計10区画の1912年の土地区画上の位置は、コタン図及び人名表の記名位置や、居住地の特定された建築物と居住地の特定されない建築物の両方が写り込む写真からの位置関係(表1を利用)や、鷹部屋氏の調査後の撮影であるが1944年の空中写真に写る建築物の位置関係により行った。この10区画の1912年の土地区画上での内訳は、区画「a」が2つ、区画「b」が4つ、区画「c」が4つ(区画「c」のB-03、B-16、B-20、C-19について、土地区画の坪数は分からないが450坪として図2に表記している)である。

(2) 土地区画の特徴

白老村アイヌ集落の土地区画は、北は国道、南は太平洋に至る2本の南北道路(南北軸から反時計回りに凡そ30度の傾きがある)と南北道路に垂直な4本の東西道路が交わった土地に対し、1区画450坪(15間×30間)を基本に区画整備されていた。

図2 土地区画図

1912年において、白老村アイヌ集落は96区画で整備されていたが、鷹部屋氏が調査を行った1940年には、96区画の外側(区画「c」)にもアイヌ民族が住んでいた事が分かる。鷹部屋氏が調査した20名の内18名は1区画の所有であることから、割り渡された給与地は1世帯に1区画(坪数は凡そ450坪)を基本としていたと考えられる。白老第2小学校は630坪の3区画、北海道庁立白老病院は360坪と450坪の2区画に位置し、共に1912年以後に区画「a」に建てられた事が分かる。1937年に両施設が旧土人保護法の改正に伴い廃止された後は、小学校は跡地が残り、病院は高橋医院として開業した¹⁵⁾。

(3) 鷹部屋氏の調査した居住地と建築物

鷹部屋氏は、1912年時の土地区画96区画と1940年当時に少なくとも建築物のあった4区画(区画「c」)の計100区画の内23区画、世帯数ではコタン図にある凡そ84名(世帯)の内20名(世帯)を調査した。20名が所有した建築物は、1940年時にアイヌ民族が使用していた建築物であり、特に鷹部屋氏は小屋組構造を中心に研究したことから、屋根に茅葺が見られる寄棟屋根の建築物を中心に調査した事が窺える。

4. 平地式寄棟建築物の特徴

「平地式寄棟建築物」23件について、平面形と延べ床面積、外観意匠、入口と窓の位置を分析し(表2)、「平地式寄棟建築物」の特徴を明らかにする。

(1) 平面形と延べ床面積

平面形は、主屋とセム¹⁶⁾の接続位置とセムの規模から大きく4つに分類し(図3、図4)、各平面形の延べ床面積をまとめた¹⁷⁾。

①平面形 a

平面形 a は、セムを伴わない平面形であり、妻入が2件、平入が10件の計12件(平地式寄棟建築物23件の内、件数比52.2%)である。延べ床面積は、8.84㎡～96.36㎡までであり、30.00㎡未満が4件(内1件は納屋)、30㎡以上50㎡未満が7件、70㎡以上が1件である。納屋である「□05S」の延べ床面積は、8.84㎡と住居より小さい。

②平面形 b-1

平面形 b-1 は、主屋の平側に小庇程度のセムが接続し、平入の平面形である。セムの屋根形状は、片流れ屋根が5件、切妻屋根が2件の計7件(平地式寄棟建築物23件の内、件数比30.4%)である。セムの面積は0.80㎡～8.46㎡、延べ床面積は26.16㎡～59.03㎡までであり、30.00㎡未満が1件(納屋)、30㎡以上50㎡未満が3件、50㎡以上70㎡未満が3件である。

③平面形 b-2

平面形 b-2 は、主屋の妻側に小庇程度のセムが接続し、セムは平入、主屋は妻入の平面形で1件(平地式寄棟建築物23件の内、件数比4.35%)ある。セムの屋根形状は片流れ屋根であり、セムの面積は1.63㎡、延べ床面積は24.24㎡である。

④平面形 c

平面形 c は、主屋の妻側に玄関(室)としてセムを接続し、セムは平入、主屋は妻入の平面形で3件(平地式寄棟建築物23件の内、件数比13.0%)ある。セムの屋根形状は寄棟屋根であり、セムの面積は12.09㎡～15.60㎡、延べ床面積は72.81㎡～82.94㎡である。

(2) 外観意匠

建築物23件の屋根は全て段々に仕上げた茅葺きである。壁は、「茅壁」が17件(件数比73.9%)、「マサ壁」が6件(件数比26.1%)である。窓の有る22件の建築物の窓の葺口は、「茅葺と木葺」が1件、「木葺」が5件、「ガラス窓」が10件、「覆い無し」が5件、「不

図3 平地式寄棟建築物の平面形

図4 平地式寄棟建築物の立面写真

図5 窓の葺口

表2 平地式寄棟建築物の特徴

建築物	平面形の分類			セムの規模と形状			主屋の規模			延べ床面積(㎡)	外観意匠		窓位置※3
	分類	セムの位置	セムの入口	主屋の入口	面積(㎡)	機能	屋根形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)	壁	窓※2	
□01H	平面形a			妻入			片流れ	13.2	7.3	96.36	茅壁	茅葺と木葺	南2東1
□03H-2	平面形a			妻入			片流れ	7.0	6.1	42.70	茅壁	覆い無し	南1
□03H-1	平面形a			平入			片流れ	8.0	6.0	48.00	茅壁	ガラス窓	南1東1
□06H	平面形a			平入			片流れ	7.4	5.9	43.66	マサ壁	木葺	南1東1
□11H	平面形a			平入			片流れ	6.5	5.2	37.70※1	茅壁	覆い無し	南1西1東1
□20H	平面形a			平入			片流れ	7.0	4.8	33.60	茅壁	覆い無し	南1東1
□12H	平面形a			平入			片流れ	6.0	5.4	32.40	マサ壁	ガラス窓	南1東1
□13H	平面形a			平入			片流れ	6.0	5.2	31.20	茅壁	木葺	南1東1
□19H	平面形a			平入			片流れ	6.0	4.9	29.40	茅壁	木葺	南1東1
□18H	平面形a			平入			片流れ	5.3	3.7	19.61	茅壁	木葺	南1東1
□17H	平面形a			平入			片流れ	3.6	3.5	12.60	茅壁	覆い無し	南1東1
□05S	平面形a			平入			片流れ	3.4	2.6	8.84	茅壁	窓なし	窓なし
□08H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	1.80	小庇	片流れ	9.7	5.9	57.23	マサ壁	ガラス窓	南1東1
□04H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	1.68	小庇	片流れ	8.8	5.7	50.16	茅壁	ガラス窓	南2東1
□05H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	0.80	小庇	片流れ	7.4	6.5	48.10	茅壁	ガラス窓	南1西1東1
□14H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	1.70	小庇	片流れ	6.8	5.3	36.04	マサ壁	ガラス窓	南1東1
□01S	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	1.80	小庇	片流れ	5.8	4.2	24.36	茅壁	ガラス窓	南1西1東1
□16H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	8.36	小庇	切妻	7.6	5.8	44.08	マサ壁	不明	南1東1
□15H	平面形b-1	主屋平側	平入	平入	1.56	小庇	切妻	7.4	5.7	42.18	マサ壁	ガラス窓	南1東1
□07H	平面形b-2	主屋妻側	平入	妻入	1.63	小庇	片流れ	4.7	4.3	22.61※1	茅壁	覆い無し	南1
□02H	平面形c	主屋妻側	平入	妻入	15.60	玄関(室)	寄棟	9.1	7.4	67.34	茅壁	ガラス窓	南2東1
□10H	平面形c	主屋妻側	平入	妻入	17.20	玄関(室)	寄棟	8.0	7.6	60.80	茅壁	木葺	南2東1
□09H	平面形c	主屋妻側	平入	妻入	12.09	玄関(室)	寄棟	8.8	6.9	60.72	茅壁	ガラス窓	南2東1

※1 長方形平面の面積の他、平側の突出する下屋部の面積も含む。 ※2 窓の表記について、「茅葺」は窓を茅で覆うもの、「木葺」は窓を木材で覆うもの、「ガラス窓」は木窓枠にガラス窓を設置しているもの、「覆い無し」は窓が覆われていない開いた状態のもの、「不明」は窓が写真に写らないものをさす。 ※3 窓位置の表記について、「南2東1」を例にとると、南面に窓が2つ、東面に窓が1つを設置している事を指す。

明」が1件である(図5)。

(3) 入口と窓の位置¹⁸⁾

建築物23件の建築物の配置は主屋長軸が各土地区画の東西軸にあたり、入口は平入では南で妻入では西に位置している。窓の位置は、「南面に窓を1つ東面に窓を1つ設置(以下、「南1東1」の様に表記)」が23件のうち12件(件数比52.2%)、「南2東1」が5件(件数比21.7%)、「南1西1東1」が3件(件数比13.0%)、「南1」が2件(件数比8.7%)、「窓無し」が1件(件数比4.3%)である。

5. 平地式切妻建築物の特徴(表3)

「平地式切妻建築物」7件は、所有者を特定し、平面形、外観意匠、平面規模の特徴を明らかにする。「平地式切妻建築物」は「平地式寄棟建築物」と同じ区画内の西側に存在し、隣接する「平地式寄棟建築物」の所有者の建築物と考えられることから、所有者を表3のように特定した。所有者は6名おり、所有者「16」は、「▲d」と「▲e」2件を所有している(図6)。平面形は、セムの伴わない矩形で、入口は平入を1件、妻入を1件で、その他5件は不明である。壁は7件全て茅壁であり、窓は設けていない。延べ床面積は、平面図が無いいため写真から判断すると、隣接する「平地式寄棟建築物」より小さい。

6. 付属建築物の特徴

「高床倉庫」4件、「熊檻」6件、「イナウ」3件の「付属建築物」について、「高床倉庫」及び「熊檻」は構造、平面形、外観意匠、平面規模の特徴を明らかにし、「イナウ」は設置位置の特徴を明らかにする。

①高床倉庫(表4、図7)

「高床倉庫」4件は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた、高床と倉庫が分離している建築物(高床式・分離型)である。平面形は、短辺が1間で長辺が1間の4本柱からなるものが2件、短辺が1間で長辺が2間の6本柱からなるものが2件である。屋根形状は、寄棟屋根が1件、切妻屋根が3件である。壁及び屋根の仕上げは全て茅葺、入口は全て妻側である。延べ床面積の分かるものは3件あり、2.25㎡～4.37㎡である。

②熊檻(表5、図8)

「熊檻」6件は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた高床と檻が分離している構造(高床式・分離型)が4件、柱を建て込み高床を設け周囲に丸太を井桁状に組む構造(高床式・一体型)が1件、柱を建て込み、地上から周囲に丸太を井桁状に組む構造(平地式・一体型)が1件である。柱数と柱間数は、全て柱数4本で柱間数が短辺が1で長辺が1である。檻は全て丸太材である。檻上蓋の分かるものは2件あり、全て丸太を平行に並べる型である。延べ床面積の分かるものは4件あり、1.40㎡～1.96㎡である。

③イナウ

「イナウ」を確認できる居住者は「01」「02」「10」の3名であり、「イナウ」は住居の東側に位置し、住居の東窓(神窓)から「イナウ」をのぞくことができる。「イナウ」の配置位置について、□01Hの住居と「イナウ」までの距離は8.0mと鷹部屋氏が平面図に記録している。

表3 平地式切妻建築物の特徴

建築物	所有者	入口	壁	窓	平面規模
▲a	04	平入	茅壁	無し	□04Hより小
▲b	08	妻入	茅壁	無し	□08Hより小
▲c	15	不明	茅壁	無し	□15Hより小
▲d	16	不明	茅壁	無し	□16Hより小
▲e	16	不明	茅壁	無し	□16Hより小
▲f	18	不明	茅壁	無し	□18Hより小
▲g	20	不明	茅壁	無し	□20Hより小

図6 2件の「平地式切妻建築物」の所有状況(調査票69Sの写真)

表4 高床倉庫の特徴

建築物	構造	柱数	柱間数		屋根形状	壁	入口	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)
			短辺	長辺						
●01P	高床式・分離型	4	1	1	切妻	茅壁	妻入	2.3	1.9	4.37
●02P	高床式・分離型	4	1	1	切妻	茅壁	妻入	1.5	1.5	2.25
●09P	高床式・分離型	6	1	2	切妻	茅壁	妻入			
●10P	高床式・分離型	6	1	2	寄棟	茅壁	妻入	2.1	1.5	3.15

切妻屋根で4本柱

寄棟屋根で6本柱

図7 高床倉庫(高床式・分離型)の屋根形状と柱数

表5 熊檻の特徴

建築物	構造	柱数	柱間数		檻上蓋	壁	長辺(m)	短辺(m)	面積(㎡)
			短辺	長辺					
●01B-1	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材	1.4	1.0	1.40
●01B-2	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材	1.4	1.0	1.40
●02B	高床式・分離型	4	1	1	丸太平行	丸太材	1.4	1.4	1.96
●10B	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材			
●09B	高床式・一体型	4	1	1	不明	丸太材	1.2	1.2	1.44
●01B-3	平地式・一体型	4	1	1	丸太平行	丸太材

高床式・分離型

高床式・一体型

平地式・一体型

図8 熊檻の構造

7. 所有者別に見た建築物の所有状況と比較

(1) 建築物の所有状況 (表 6)

新白老町史¹⁹⁾には、白老村アイヌ集落のコタンコルクル(村長)の家系(本研究での居住者記号「01」、「10」)の記載があり、また、1911年の東宮殿下の白老村の来訪時に東宮殿下を案内したアイヌ民族(「01」、「02」、「09」、「10」)の4名が記載されており、この4名は「村長及び村長に準ずる人²⁰⁾」と考えられる。白老村アイヌ集落の人々を「村長及び村長に準ずる人(4名)」と「その他の人(16名)」に分類すると、建築物の所有状況は以下のようになる。

なお、第3章の土地区画と建築物の所有状況と鷹部屋氏が記録した平面図から、居住者20名の計43件の建築物は配置図の作製が可能であり(平面図の無い建築物は写真から建築物の位置関係や平面規模を検討する必要がある)、本研究では図9～図12の4例を記している²¹⁾。

①「村長及び村長に準ずる人」が所有する建築物

「村長及び村長に準ずる人」の住居(□01H、□02H、□09H、□10H)は、□01Hは平面形aで、□02H、□09H、□10Hの3件は平面形cであり、延べ床面積は72.81㎡～96.36㎡である。

居住者「01」の住居以外の建築物は納屋を1件、高床倉庫1件、熊檻3件、イナウを所有している(図9)。居住者「02」及び「10」の2名は、高床倉庫1件、熊檻1件、イナウを所有し、居住者「09」は、高床倉庫1件、熊檻1件を所有している(図10)。

②「その他の人」が所有する建築物

「その他の人」の住居は、平面形aや平面形aに小庇程度の付属屋を伴った平面形b-1及び平面形b-2であり、延べ床面積は12.60㎡～59.03㎡と「村長及び村長に準ずる人」の住居より小さい。建築物の所有状況を大きく分類すると、「住居のみを所有する人々(図11)」9名と「住居及び住居以外の建築物²²⁾(「平地式寄棟建築物」1名と「平地式切妻建築物」6名)を所有する人々(図12)」7名の2つに分けられる。

(2) 所有する建築物の比較 (表 7)

「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」が所有する住居を比較すると、住居の延べ床面積、主屋の規模、セムの規模に違いが見られた。「村長及び村長に準ずる人」の所有する住居の延べ床面

表 6 建築物の所有状況

居住者分類		住居分類			住居以外の建築物の有無				
居住者	分類	平地式寄棟	平面形	延べ床面積(㎡)	平地式建築物	平地式切妻	高床倉庫	熊檻	イナウ
01	村長及び村長に準ずる人	□01H	平面形a	96.36	□01S	無し	●01P	●01B-1 ●01B-2 ●01B-3	●01I
02		□02H	平面形c	82.94	無し	無し	●02P	●02B	●02I
10		□10H	平面形c	78.00	無し	無し	●10P	●10B	●10I
09		□09H	平面形c	72.81	無し	無し	●09P	●09B	無し
03	その他の人(9名)	□03H-1	平面形a	48.00	無し	無し	無し	無し	無し
		□03H-2	平面形a	42.70	無し	無し	無し	無し	無し
06		□06H	平面形a	43.66	無し	無し	無し	無し	無し
11		□11H	平面形a	37.70	無し	無し	無し	無し	無し
12		□12H	平面形a	32.40	無し	無し	無し	無し	無し
13		□13H	平面形a	31.20	無し	無し	無し	無し	無し
19		□19H	平面形a	29.40	無し	無し	無し	無し	無し
17		□17H	平面形a	12.60	無し	無し	無し	無し	無し
14		□14H	平面形b-1	36.74	無し	無し	無し	無し	無し
07		□07H	平面形b-2	24.24	無し	無し	無し	無し	無し
20	その他の人(7名)	□20H	平面形a	33.60	無し	▲g	無し	無し	無し
18		□18H	平面形a	19.61	無し	▲f	無し	無し	無し
08		□08H	平面形b-1	59.03	無し	▲b	無し	無し	無し
04		□04H	平面形b-1	51.84	無し	▲a	無し	無し	無し
15		□15H	平面形b-1	43.74	無し	▲c	無し	無し	無し
16		□16H	平面形b-1	52.44	無し	▲d,▲e	無し	無し	無し
05		□05H	平面形b-1	48.90	□05S	無し	無し	無し	無し

図9 「村長及び村長に準ずる人」の建築物の配置図(居住者「01」)

図10 「村長及び村長に準ずる人」の建築物の配置図(居住者「02」)

図11 「その他の人」の建築物の配置図(居住者「07」)

図12 「その他の人」の建築物の配置図(居住者「08」)

積は 72.81 m²～96.36 m²、主屋の規模は 60.72 m²～96.36 m²、セムが接続する住居におけるセムの形状は寄棟屋根の玄関(室)で(平面形 c のセム)、セムの規模は 12.09 m²～17.20 m²である。一方で「その他の人」の所有する住居の延べ床面積は 12.60 m²～59.03 m²、主屋の規模は 12.60 m²～57.23 m²、セムが接続する住居におけるセムの形状は片流れ及び切妻屋根の小庇で(平面形 b1 及び平面形 b2 のセム)、セムの規模は 0.80 m²～8.36 m²であり、延べ床面積、主屋の規模、セムの規模(セムの形状も含む)の全てが「村長及び村長に準ずる人」の所有する住居より小さい。

「村長及び村長に準ずる人」及び「その他の人」の所有する住居に共通して見られた特徴は、住居配置は主屋長軸が各土地区画上の東西軸にあたり、入口が平入では南で妻入では西にあった事、採光用に南窓を 1～2 つ設け、神窓として東窓を 1 つ設ける窓位置が「村長及び村長に準ずる人」の住居の全て、「その他の人」の住居 17 件中 12 件(件数比 70.6%)に見られた事である(なお、主屋の規模が 50 m²以上の住居は、「村長及び村長に準ずる人」の住居 4 件と「その他の人」の住居 2 件の計 6 件あり、内 5 件が南窓を 2 つ設けていることから、主屋の規模の大きな住居の南面に窓を 2 つ設置する特徴も見られる)。また、1937 年に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められたことによる影響と考えられる、「マサ壁」や「ガラス窓」を備えた住居は、「村長及び村長に準ずる人」の住居 4 件の内 2 件(件数比 50%)、「その他の人」の住居 17 件の内 8 件(件数比 47.1%)に見られた。

住居以外の建築物の所有状況を見ると、「村長及び村長に準ずる人」は「高床倉庫」や「熊檻」や「イナウ」等の「付属建築物」を全員が所有するのに対し、「その他の人」は「付属建築物」を所有せず、「平地式切妻建築物」の所有(16 名の内 6 名)と「平地式寄棟建築物」の所有(16 名の内 1 名)であった。

8. 結論

本研究は、「毛民青屋集」7～8 を基にして、下附実測図(1912 年)、コタン図(1926 年から 1937 年)、空中写真(1944 年)を検討する事により、1940 年の白老村アイヌ集落の土地区画の特徴、白老村アイヌ集落の居住者 20 名の「平地式寄棟建築物」23 件、「平地式切妻建築物」7 件、「付属建築物」13 件の計 43 件の建築物の外観の特徴、平面規模の特徴、建築物の所有状況を明らかにした。

白老村アイヌ集落の土地区画は、2 本の南北道路(南北軸から反時計回りに凡そ 30 度の傾きがある)と南北道路に垂直な 4 本の東西道路が交わった土地に対し、1 区画 450 坪(15 間×30 間)を基本に区画整備され、1940 年時におけるアイヌ民族に割り渡されていた給与地は、1 世帯に 1 区画(坪数は凡そ 450 坪)を基本としていたと考えられる。

一方で建築物においては、「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」に居住者を分類すると違いが見られた。「村長及び村長に準ずる人」が所有した住居は、延べ床面積、主屋の規模、セムの規模において「その他の人」が所有した住居より大きく、また、住居の他に「高床倉庫」や「熊檻」や「イナウ」の「付属建築物」を所有していたのに対し、「その他の人」が所有した建築物は住居のみの所有もしくは住居と「平地式切妻建築物」か「平地式寄棟建築物」

表 7 所有する建築物の比較

		村長及び村長に準ずる人(4名)	その他の人(16名)
住居	延べ床面積	72.81m ² ～96.36m ²	12.60m ² ～59.03m ²
	主屋の規模	60.72m ² ～96.36m ²	12.60m ² ～57.23m ²
	セムの形状※	寄棟屋根の玄関(平面形cのセム)	片流れ及び切妻屋根の小庇(平面形b-1及びb-2のセム)
	セムの規模※	12.09m ² ～17.20m ²	0.80m ² ～8.36m ²
	配置	主屋長軸が土地区画上の東西軸	主屋長軸が土地区画上の東西軸
	窓位置(件数比)	4件中4件が南に2つ、東に1つ(100%)	17件中11件が南に1つ、東に1つ(64.7%) 17件中12件が南に1～2つ、東に1つ(70.6%)
住居以外	「マサ壁」や「ガラス窓」を備えた住居	4件中2件(50.0%)	17件中8件(47.1%)
	「付属建築物」その他の建築物の所有状況	4名全員が「付属建築物」を所有 4名中1名が平地式寄棟建築物を所有	16名中6名が平地式切妻建築物を所有 16名中1名が平地式寄棟建築物を所有(残り9名は住居のみ)

※セムの形状及びセムの規模は、各所有者の住居の内、セムを伴う住居を対象としている。なお、「村長及び村長に準ずる人」の住居の 4 件中 1 件、「その他の人」の住居の 17 件中 10 件は、セムを伴わない平面形(平面形 a)である。

の所有であった。なお「高床倉庫」は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた、高床と倉庫が分離する構造(高床式・分離型)であり、屋根形状は寄棟屋根と切妻屋根が見られた。「熊檻」は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた高床と檻が分離している構造(高床式・分離型)、柱を建て込み高床を設け周囲に丸太を井桁状に組む構造(高床式・一体型)、柱を建て込み、地上から周囲に丸太を井桁状に組む構造(平地式・一体型)の 3 構造が見られた。「イナウ」は住居の東側に位置し、住居の東窓(神窓)からのぞく事ができた。「平地式切妻建築物」は住居の西側に位置し、セムの伴わない矩形平面で、壁は茅壁で、窓は設けていなかった。

「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」が所有した住居に共通して見られた特徴は、住居配置は主屋長軸が各土地区画の東西軸にあたり、入口は平入では南で妻入では西に位置していた事である。また、採光用に南窓を 1～2 つ設け、神窓として東窓を 1 つ設ける窓位置は共に 7 割以上に見られ、「マサ壁」や「ガラス窓」を備えた住居は共に 5 割程に見られた事である。

注

- 1) 新白老町史下巻を参考とした。白老町町史編さん委員会:新白老町史下巻、第一法規出版株式会社、1992 年 11 月 3 日。
- 2) 主な皇族の来訪者は以下の通りである。1918 年の閑院宮載仁親王殿下、1928 年の徳川喜久子姫、1932 年の澄宮殿下、1934 年の北白川永久王殿下、1936 年の朝香宮鳩彦王殿下等。前住研究者は、棚橋諒氏、鷹部屋福平氏、杉野謙三氏等であり、1940 年前後に白老村を訪れている。
- 3) 鷹部屋福平氏は構造力学の研究者・北海道帝国大学工学部教授であり、また、アイヌ民族の建築に関する研究の第一人者である。代表する研究は以下の通りである。鷹部屋福平:アイヌ屋根の研究と其構造原基體について、北方文化研究報告、第一輯、pp.107-161、1939 年 3 月。同:アイヌ住居の研究、北方文化研究報告、第二輯、pp.1-123、1939 年 10 月。同:アイヌ住居の研究-アイヌ家屋の地方的特性-, 北方文化研究報告、第三輯、pp.209-265、1940 年 5 月。同:アイヌ民族の使用したる計量の単位並びに「音」の名称に関する研究、北方文化研究報告、第四輯、pp.113-135、1941 年 2 月。同:アイヌ住居の研究-日高平取方面に於ける地方性-, 北方文化研究報告、第五輯、pp.103-142、1941 年 7 月。同:アイヌの生活文化、アルス、1942 年 6 月。アイヌの住居、彰国社、1943 年 3 月。同:北方圏の家、彰国社、1943 年 12 月。
- 4) 鷹部屋福平氏の私家版写真帖であり、現在、所蔵先の確認できる「毛民青屋集」は 5～6(二風谷村)、7～8(白老村)であり、北海道大学付属図書館が所蔵する。「毛民青屋集」7～8の北海道大学付属図書館の資料

- 目録は以下の通りである。北海道大学北方関係資料総合目録：白老村写真帖第1～2冊（折本仕立）／鷹部屋福平（シラオイムラ シャシンチョウ ダイ1-2 サツ（オリホン シタデ）），成立年／昭和15年（1940年），形態／112枚（各7.5×11cm）原，資料注記／鷹部屋福平「毛民青屋集」7～8（白老村アイヌ住居の写真集），請求記号／別・ア 720-Ta（北大北方資料室），収載目録名／明治大正期北海道写真目録（明治大正期の北海道・目録編），レコードID／0B0301300000000000。鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -，北方文化研究報告，第五輯，pp. 103-142，1941年7月。なお、二風谷村については、以下の論文を参照。佐久間学，羽深久夫：鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態，日本建築学会計画系論文集，第79巻，第706号，2014年12月。
- 5) 園内はアイヌ民族の茅葺きの家（チセ）5棟を中心にかつての集落の様子を伝えるとともに、チセ内ではアイヌの伝統芸能や手工芸の実演など、無形文化の伝承保存・公開を行う点が特色となっている。（アイヌ民族博物館HP 参照：http://www.ainu-museum.or.jp/index.html）
- 6) 本研究において、伝統的なアイヌ民族の建築物とは、現在復元されている茅葺屋根の茅壁といった定説的なアイヌ民族の建築物を指す。
- 7) 1937年（昭和12年）に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められており、以後、アイヌ民族建築物の様相は、「マサ壁」の建築物が見えたり、「ガラス窓」を設置した建築物が見えだしたと考えられる。本研究において、同化政策の影響が現れた1940年当時のアイヌ民族の建築物とは、6)で示した建築物の他、「マサ壁」や「ガラス窓」等を設けていた建築物も含めた1940年当時のアイヌ民族の建築物であることを意味する。
- 8) 鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -，北方文化研究報告，第三輯，pp. 209-265，1940年5月。
- 9) アイヌ民族の建築物に関する研究は、鷹部屋氏が研究した1930年代後半から1940年代前半に集中している。代表的な研究は以下の通りである。棚橋諒：アイヌの住居，民家，民家研究会，第Ⅱ輯12号，1938年12月。同：アイヌの住居（2），民家，民家研究会，第Ⅲ輯1号，1939年1月。同：アイヌの住居（3），民家，民家研究会，第Ⅳ輯2号，1939年2月。杉野謙三：アイヌ部落，満洲建築雑誌，1940年。金田一京助：アイヌ芸術，木工編，1942年。村田治郎：アイヌの家の史的解釈，建築学会大会梗概集，1950年8月。同：原始住居構造の一つの型，建築雑誌，775号，1951年7月。近年の研究には、小林孝二氏のアイヌ文化期を対象とする発掘報告書と18世紀中期から19世紀後半にアイヌ民族の住居を描いた絵画資料を基に、アイヌ文化成立期（13世紀前後）から近世紀末（19世紀後半）までのアイヌ民族の住居の特徴を明らかにした研究がある。小林孝二，大垣直明：近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第608号，pp. 127-134，2006年10月。同：アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 -，日本建築学会計画系論文集，第615号，pp. 191-198，2007年5月。
- 10) イナウはアイヌ民族の祭壇であり、白老村アイヌ集落のイナウの上部には熊の骨をまつている。
- 11) 北海道立文書館が所蔵する手書地図。資料目録は以下の通りである。胆振国白老郡白老村字コタン旧土人下附実測図：請求記号／Ma-1/2923，分類／A 7-2 北海道庁 _ 支庁・郡役所，主務者名／北海道庁室蘭支庁，年次／1912（明治45），形態／1枚（77×86cm），注記／縮尺 1:1200。
- 12) 1) と同一資料。
- 13) 84名（世帯）は、コタン図に描かれたアイヌ民族名を数えたものである。補足として、下附実測図の各区画の姓とコタン図の記名箇所の姓が一致する者は、84名の内32名いた。
- 14) 国土地理院所蔵の空中写真。空中写真注記は以下の通りである。撮影年／1944年10月22日（昭和19年），撮影実施機関／陸軍，整理番号／91Q32，コース番号／C5，写真番号／110。
- 15) 北海道庁立白老病院の院長、高橋房次氏は、1937年の旧土人保護法改正によって白老病院が閉鎖された後も、同じ場所で「高橋医院」を開業し、1960年に医師の仕事を全うし78歳でこの世を去った。以下の資料を参考とした。白老町町史編さん委員会：新白老町史上巻及び下巻，第一法規出版株式会社，1992年11月3日。
- 16) セムはアイヌ語で、主屋入口に接続する下屋（前室や庇や風除室の機能）をさす。本研究において、セムを伴わない建築物についても、屋根の小屋組下の室を主屋と表記する。なお、アイヌ民族の建築物に関する第一人者である鷹部屋氏と棚橋氏の両氏が論文において「セム」というアイヌ語を

- 用いていることから、本研究においても「セム」を用いている。鷹部屋氏の研究は3)を参照。棚橋氏の研究は9)を参照。
- 17) 平面形aの「□ H03-1」及び「□ 11H」と平面形b-2の「□ 07H」の主屋平面形は、側面にセムとは異なる（入口に接続する下屋ではない）下屋を突出する平面形であるが、主屋平面形は矩形平面と同等に扱った。
- 18) 平面図から入口及び窓位置の他、入口幅と窓幅が分かる。入口幅は0.6～1.6m、入口幅は0.6～2.2mまでである。
- 19) 1) と同一資料。
- 20) 1) の資料である新白老町史から、村長の家系と東宮殿下の白老村来訪時の案内役を務めたアイヌ民族の人々の4名の総称を「村長及び村長に準ずる人」と定義した。なお、「村長に準ずる人」について、村長の家系の居住者「01」及び「10」が所有した建築物と村長の家系の他に案内役を務めた居住者「02」及び「09」の所有した建築物の特徴は共通し、「その他の人（16名）」が所有した建築物と異なるので、「村長」以外の案内役を務めた人は「村長に準ずる人」であったと考えられることから定義している（4名の人名は新白老町史に記載があるが、表1の調査票の記載内容の居住者番号を用いている）。
- 21) 配置図の建築物は、「毛民青屋集」7～8の調査票に添付されている平面図を基に作製し、寸法表記は省略し、代わりにスケールを表記している。なお、図9の● 01B-3（熊檻）、図10の● 02I（イナウ）、図12の▲ b（平地式切妻建築物）については、調査票に平面図が添付されていないため、写真から建築物の位置関係と平面規模を推測して表記してある。
- 22) 住居以外の建築物のうち「平地式寄棟建築物」の用途は、鷹部屋氏の記載から納屋であった事が分かる。

ACTUAL CONDITIONS OF ARCHITECTURAL STRUCTURES OF AINU SETTLEMENT AT
SHIRAOI IN 1940, BASED ON “COLLECTION OF THATCHED-ROOF HOUSES OF THE AINUS”
BY FUKUHEI TAKABEYA

*Manabu SAKUMA** and *Hisao HABUKA***

* Graduate Student, Graduate School of Design, Sapporo City University, M. Des.

** Prof., Graduate School of Design, Sapporo City University, Dr. Eng.

This study, based on *Collection of Thatched-Roof Houses of the Ainus* Volumes 7 through 8 and conducted through the investigation of old maps and aerial photographs, reveals layout features and features of building appearance, surface scale, and ownership details of the Shiraoi Village Ainu settlement in 1940.

The Shiraoi Village Ainu settlement was laid out such that there were two north-south roads and four east-west roads intersecting perpendicularly to form a grid. A single section area was maintained to be approximately 1,485 square meters (27 m x 55 m). The settlement that Takabeya investigated in 1940 was divided among the villagers such that each Ainu family household was allotted one section of land.

Another avenue of investigation was conducted by way of examining village houses. There were observed differences in house design upon separating villagers into either “village chief/equivalent” or “other people” categories. Houses belonging to “village chief/equivalent” villagers had elongated floor space and both the main and auxiliary structures were larger in scale than those belonging to the “other people” villagers. Furthermore, “village chief/equivalent” villagers owned structures such as elevated storehouses, bear pens, and attached buildings containing *inaws* (ritual prayer sticks). “Other people” villagers did not possess such structures and what they did possess was apparently intended only for habitation. It is also possible that gabled roof houses were used both for habitation as well as for auxiliary activities.

In addition, there were traits common among the houses of both groups. For example, construction was arranged such that houses had their longer axis parallel to the east-west axis of the settlement. One or two windows were installed facing south in order to maximize lighting. Houses with an east-facing “holy window” had seven or more partitions. Finally, houses containing walls made from the Japanese spindletree (*Euonymus japonicus*) and possessing a glass window were divided into five partitions.

(2014年7月9日原稿受理, 2014年10月17日採用決定)